

農業総合研究所 著『農産物価格分析論』

Geoffrey S. Shepherd Agricultural
Price Analysis, 3 ed 1961

篠原泰三

最初に本書がどのような内容を持つものであるかということについて考えて見たい。原著書の序文によると、この書物は「農産物価格の研究に経済理論と統計分析法を適用せんとしたものである」という。このようにはつきりと断つてある通り、本書の中には「経済理論の適用」と「統計分析法の適用」との二つのことが為されている。換言すれば、何故に起つたかという問題と如何にして計測するかという二つのことが為されている。このことから本書の内容を或程度雑然としたものにし、すつきりとさせていないことは事実のようである。若し経済理論の適用ということのみに終始したとするならば、例えば農産物価格の長期的変動を問題とするに際しても、この長期的変動の様相、諸事件間の相互関係の分析による長期的変動の説明が問題とされたであらう。そうして若し統計分析の適用、つまり計測の立場から問題が取上げられたとしたならば、長期的価格変動の底に横たわる諸要因の計測が問

題とせられたに相違ない。この二つの立場は全く異つた立場であると言われはならない。勿論、経済理論の適用の立場から言つても、長期的変動の解明が問題になつてはいる場合に、諸要因相互間の量的な関係が問題となつて居り、それを量的に測定し把握することが必要であるということから、計測の問題が当然入り込んで来ねばならない。併し経済学の適用の立場に取つては、「如何にして計測するか」ということは直接の問題ではなく、「計測の結果が如何であつたか」ということが当面の問題である筈である。同様に統計学の適用の立場から問題を取上げる場合に於ても、勿論その前提となるのは経済学であつて、経済学が与えた論理的構造の上に立つて、例えば経済学上の概念として構成された需要曲線というものについて、その弾力性を統計的に測定するということが問題とされる。換言すれば経済学上の理論構成というものを離れて計測はあり得ない。併しこの場合の目標は何処までも計測することにある筈である。

このように、原著者のいう「経済理論の適用」と「統計分析法の適用」とは——農業経済学が単に質的な取扱ひを内容とする学問から量的な取扱ひを内容とする学問へと転化しつつある現段階に於ては——お互いに切離すことの出来ない関係にあるけれども、その各々は夫々それとしては独立の分野である。この二つの問題が一つの書物の中で、同じようなラケットを持つて記述されるということか適当であるか否かは問題のある点ではないかと思ふ。著者は本書の中で例えば「工業物価格が農産物価格より安定

しているのは何故か」と言つたような経済学上の問題を取上げるかと思うと、一方では他の場所にて「軍相関法」の詳細な説明を行つてゐる、と言つた工合である。このようなやり方は少くとも読者に或種の不統一を感じさせるのではないだろうか。

併し右に述べたような不備は本書が教科書として書かれたものであると理解すれば消滅する。このような本書の構成方法が、本書が教科書として非常に優れたものであるということの一つの理由になつてゐるように思われるからである。教科書としては、若干の不統一はあるにしても、出来るだけ多くの問題点を提起し、それ等の相互關係を明らかにすることに成功すれば、それだけ既成程度成功しているものと見ることが出来るであらう。この意味では確かに本書は成功しているようである。一つ一つの問題点についてのつきつめな究明は行われていないにしても、相当地に広い領域に亘つて問題点が相当網羅的に提出されて居るということが出来そうに思われるからである。若し優れたリーダーが得られたならば、恐らく本書は教科書としては絶好のものであらうと思う。東畑教授の本訳書の序文の中で、本書が「アメリカに於て教科書として類書の中で最も多く利用せられてゐるものである」と記されてゐるのは此様な事情によるのであらう。

二

次に本書の記述の具体的な内容について考えてみよう。本書の第一章から第三章までは全体の構成から見ると序論的な部分であ

るとなすことが出来る。此處で著者は農産物価格の長期的変動、短期的変動の概括的な説明を行つてゐる。そうしてこの説明の手段として、需要曲線、供給曲線という概念が此處で持ち込まれる。農産物価格の長期的変動は需要曲線と供給曲線との移行の結果であると説明される(第一章)。そうしてこの両曲線の移行を引起す諸要因(例えば技術の進歩とか、人口の増加とか)の分析を行うことを以て長期的農産物価格変動論の内容とするのである。次いで(第二章)短期的変動の問題とすに際しては、「供給の短期(年次)弾力性」、「需要の短期弾力性」という概念を用いる。農産物の場合にはこの需要、供給の短期の弾力性が共に小であるために価格に激しい変動が起るのであるという説明が為される。此の場合にも価格の変動は両曲線の弾力性値と両曲線の移行とを關係せしめることによつて説明される。次に第三章では個別的な農産物価格の過期的変動の問題として取入れられる。此の章の具体的な内容は「蜘蛛の巣理論」である。豚、肉牛、比給薯を例としてその説明が為されてゐる。

以上三章の分析は本書の全体から言えれば序論的な部分で、此處で幾つもの経済学上の概念が提示される。供給曲線、需要曲線、短期の供給曲線、短期の需要曲線、両曲線の移行、時の遅れ、等かこれである。更に最初の三章ではそれほどはつきりした形では出て来ないが、後に明確な形で出て来る概念として、「他の事情にして等しい場合一の供給曲線と然らざる場合の供給曲線(一一八頁)、非可逆曲線(一二〇頁)等々がある。之等相互の關係は必

すしも明確でないか、之等か時に庇して説明の手段として駆使されるのである。併し少くとも最初の三章の段階では之等の概念は後の詳細な記述の爲の準備として持出されたに過ぎず、夫々の概念は未だ充分に説明されて居らず、著者か之等の概念を適宜に堅使して行つ説明も必ずしも充分であるとは言えないようである。此處では單に全体の基本的な考え方の概を出し、後に必要とする色々な概念を提示して置くということか著者の主な意圖であつたのではないかと思われる。

三

次に第四章から第九章までは需要曲線、供給曲線の弾力性の概念規定、而曲線の変化の計測の問題にあつては、第四章以下は言わば本論であつて、論述の仕方は前三章とは異つて益かに行届いている。例へば需要の弾力性の説明にしても極く切歩的な所から始まる。現実の数字の例を用いて「平均弾力性」の概念の説明から始め、然る後「点弾力性」の概念に及ぶと言つた具合である。そして著者の此部分の記述の中心問題は「如何にして」需要、供給の弾力性を計測するか、という所に向けられている。時系列を用いて需要、供給両曲線を求める場合について考えてみると、現実には我々が持つてゐるデータは両曲線の交点と見られるものについてである。此處で若し需要曲線が不変、つまり移行しなかつたものとし、供給曲線のみ移行したものとすれば、この交点、即ち我々の持つてゐるデータはそのまゝ需要曲線をあらわす

ものとなり、逆に供給曲線が不変で需要曲線のみ移行したものと仮定すれば交点は供給曲線をあらわすことになる。現実のデータは余程特殊な場合を除いて両曲線ともに移行した場合の交点を示すものであらう。このような事態の下で供給曲線又は需要曲線と考へて然るべき曲線を、或はその弾力性値をとのような操作によつて導き出すか。これを真から言へば、或種の操作によつて導き出されたものの経済学上の意義如何、という厄介な問題か此處での主要な問題である。色々な統計的操作、例へば減偏修正とか趨勢値をあてはめることとか、の意義について若干の議論が展開される。重相関度の意義とその方法が説明される。就中曲線重相関の図式解法について著者は多くの頁数を割いて説明している。これを要するに、第四章乃至第九章の主要課題は計測の問題であつて、その敘述は前三章の場合と異つて懇切であると同時に周到である。それは問題のこの部分に関する限り、最近十年乃至二十年の間の著しい進歩であつて、或程度纏つた体系が既に存在しているからであらう。

四

次に第十章から第十二章に至る三章で再び著者は経済学に立歸る。此處で説かれてゐるのは生産費、価格、売出货量か市場構造との関連の下でどのように決定されるかということについての一般理論である。具体的な例を用いて説明しているという点を除けば、また、この理論の合衆国の農業の現実への適用を絶えず意識

しているという点を除けば、本質的には、ノヤン・ロビンソンがその「不完全競争」の中で述べ、またエドワード・チュムハリンが「独占的競争」の中で説いている所と本質的には相違はないように思われる。併しその説明は非常に簡略化されているので、読者か或程度の知識を持つてゐることを前提としていることは明らかである。事実全然予備知識なしに此の部分を読んでも充分に理解することは恐らく困難であらう。

第十三章以下（第十八章に至る）は本書全体の構造から言えば「難」とも言うべき部分であらう。一章一章が夫々別個の問題を取扱つてゐる。そうして此の第十三章のみが統計学的な問題である。即ち此処では計測の結果の有意性（*Significance*）の問題を取扱つてゐる。他の大部分は本書の今迄の部分で展開した議論の現実への適用とも言ふべきものから成る。例えは地理的な価格差の問題、中間経費の問題、先物価格の問題、ハリタイの問題などである。此のうちハリタイに関する部分は合衆国の現行制度の説明とそれに附随する諸問題を取扱つてゐて、我々には可成り興味があるように思われた。

五

最後に本書の読後感を附記したい。最初に述べたように、本書は教科書であつて、本書によつて何等かの主張をしようとするような種類の本ではない。併し本書の多岐に亘る論述の中で、何処か中心的部分かと言つと、何と言つても、第四章から第九章ま

での部分であらう。此部分は本書の全体の中で最もよく纏つた部分である。他の部分はどちらかと言へば教科書としての要請に答える為に論述の領域を拡張し、且つ現実の合衆国農業が当面している問題への理論の適用を試みた、と言つたような種類のものである。本書はこの複雑な構成を持つた全体の中の部分部分をバラバラにして、夫々の部分と同じ題目について取扱つた他の書物と比較してみると、必ずしも本書が類書の中で最善のものであるとは言えないかも知れない。併し現代の農産物価格論を学ぼうとする人に、一冊の書物でこれだけ多くの重要な論点を提示し、農産物価格論への展望を与えて呉れる書物は他には無いのではなからうか。本書がしつかりと理解出来れば、農産物価格論について、既知の領域として地固めの出来た部分には一通通することが出来、同時に一歩進んで現在の問題点への接近の準備が成つたとも言ふことが出来るのではなからうか。この意味では誠に優れた教科書と言わねばならないと思う。

本書は農業総合研究所の多数の人々の合作になる由であるが、多数の人々の合作の場合に見勝ちな訳文の硬さや不統一は感ぜられず、非常に流暢な気持ちのよい訳文である。このような、教科書としてもハンド・ブクとしても非常に都合のよい書物の翻訳が出来たということは我々に取つて非常に有難いことであると思う。